

渋沢フィルムの図像解析とその応用

八久保厚志
HACHIKUBO Koshi

須山 聡
SUYAMA Satoshi

本稿は、神奈川大学 COE プロジェクト第3班における研究テーマである「渋沢フィルム」の非文字資料としての写真、16 mm フィルムの図像解析とそのための手法開発についての2003年度報告である。本稿は、第1部「渋沢コレクションの図像解析とその応用案」として、八久保が現時点での手法的な枠組みを示し、第2部「渋沢フィルムの現地比定—奄美大島を事例として—」として、須山が渋沢コレクションにある奄美大島の景観写真を利用した事例を示すことにする。

第1部 渋沢コレクションの図像解析とその応用案

I はじめに

本稿は、本プロジェクトの第3班の研究テーマ「環境と景観に関する図像の資料化と体系化」について、日本常民文化研究所が保有する渋沢敬三らによって撮影・収集されてきた写真、16 mm フィルムを中心とした映像資料（以下渋沢コレクションと呼ぶ）の中から、約4,000枚の写真（以下渋沢フィルムと呼ぶ）を利用して、昭和初期のわが国の景観や民俗写真から現在にわたる時系列変化⁽²⁾⁽³⁾について資料化することと、体系的な利用を図るための手法開発を目的に設定されたものである。

筆者らは幾度かの研究会と現地調査、渋沢フィルムの分析から当面の分析手法と事例研究に短い時間を集中させることにした。その結果、次章以下の分析手法案と第2部の事例研究の成果を得ることができた。

II 基本的な研究のフレームワーク

筆者らは本研究の基本的な枠組みを以下のように設定した。1) 民俗学者渋沢敬三のまなごしをさぐること、2) 比較考察のための手法を確立すること、3) 景観変化と人間（活動）の関係を探ることである。そして結果的に多様な非文字資料を体系的に設定・収集・利用することによって、新たな景観論の構築や、非文字資料の利用における資料学への寄与を検討することを当面の目標とすることにした。⁽³⁾ 以下、順にその体系の内容について述べることにする（図1）。

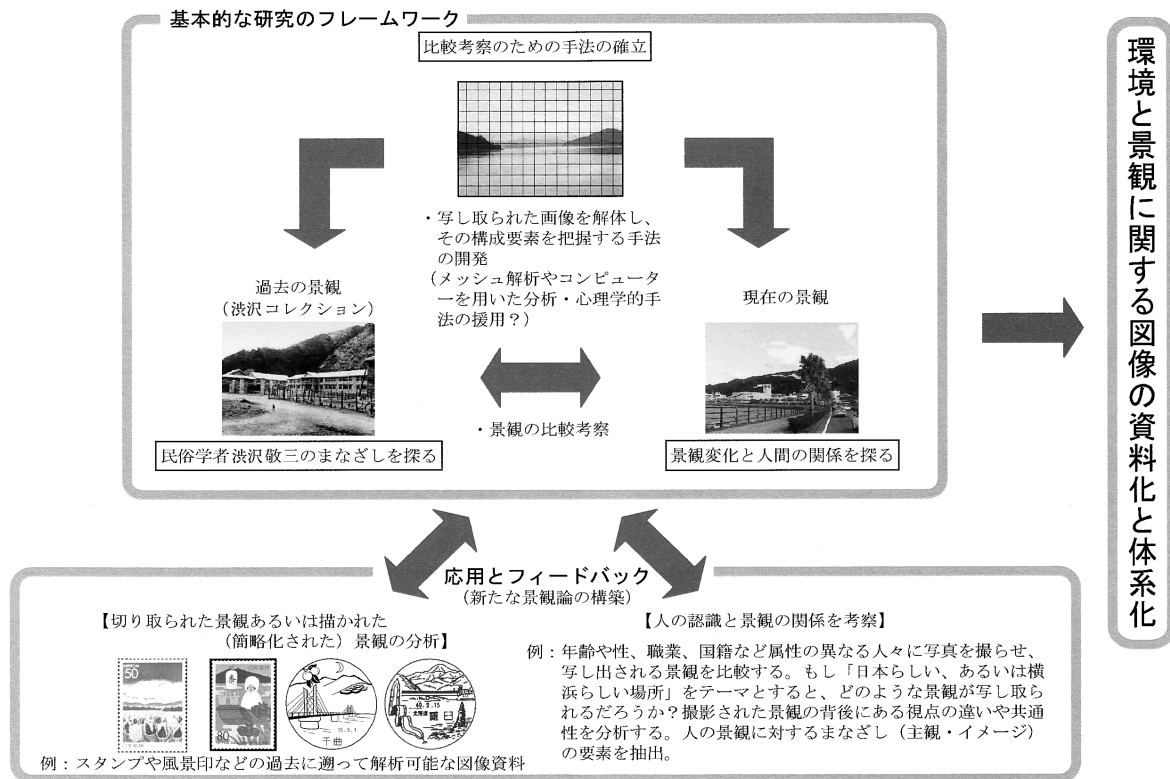


図1 渋沢コレクションの画像解析とその応用(案)

1 渋沢敬三のまなざし

渋沢コレクションは、渋沢氏本人が撮影したものばかりでなく、氏の興味はもちろんのこと実際の撮影者の興味や視角が重層的に反映されたものとみることができる。したがって、可能な限り写真、16mmフィルムなどの撮影者の特定を行い、かつ、撮影者と渋沢氏との関係や履歴などの情報を整理する必要がある。そこで、人物史的な整理や民俗学や関連諸学の位置づけなどを明らかにすることが必要である。また、撮影時期の特定にも注意が必要である。基本的な時代区分は、昭和初期もしくは10年代から30年代までが大部分とみられるが、もっと古い時期や新しい時事のものも散見されるようであり、この点の特定作業も必要となっている⁽¹⁾。同時に場所の特定作業も進めなければならない。保存形式上、地域名の幅が広い場合もあり、明らかに違う場所に保存されているものもあるようである。時系列な整理が基本的な課題と設定したものの、場所的な異同が存在するという事実から空間的な整理の方法も視野に入れる必要があると考えられる⁽³⁾。このような注意と作業によって渋沢敬三や撮影者が「何」をどのように記録したかったか、示したかったのかに接近することが可能になるのではないと思われる。

2 比較考察のための手法開発

ここでは、写し取られた画像を解体し、その構成要素を把握する手法の開発を検討し、多少の事例研究を行う。この点については第2部で奄美大島を事例に試行が行われているので多くは触れないが、例えば渋沢フィルムの1枚1枚について、メッシュ解析やコンピューターを用いた心理学的な景観認知の手法を援用したり、構成要素の多変量解析を試みたり、また、民俗方位や風水など諸学の解析手法を検討することで景観の比較考察がより有効なものとなるべく検討をする。

3 景観変化と人間の関係

景観変化は、基本的に自然の営力と人文的な営力の混在した、もしくは総合化した結果とみることができよう。景観変化は、地殻変動や地形学的・水文学的・気象学的な変化の他、ヒトやヒトの生産活動⁽³⁾や、社会的活動、争いごとや宗教上などの諸活動の結果とみることができる。したがって、人間の諸活動を景観資料でどのように伝えることができるかが、非文字資料、とりわけ映像資料だけである事実が記録・伝達できる情報として客観資料化できるか、この点の整理は極めて重要である。このようなものとして景観変化と人間の関係を模索していく必要がある。

III 応用とフィードバック

前章で示したように、渋沢コレクション全体の非文字資料としての映像資料は、様々な可能性を秘めていると考えられる。ただ、第2部で詳述するが、渋沢コレクションを補完する上で様々な異形態の非文字資料の設定・収集・利用が必要である。まず时期的に現在と渋沢フィルムの間を埋める写真の収集である。今年度筆者らが実態調査で訪れた島嶼地域は、わが国の社会経済上の周辺地域、いわば僻地であり、ここの景観変化はここ2~30年間での変化がより大きい。したがって、昭和初期と現在の景観変化は極めて大きく、その間の昭和40年代前後の時期の写真が必要である。しかし、写真撮影が広く社会全般に広がりつつあったものの、この時期の写真は時期が近いので市井に収集品として出回することは少ない。知人や公的機関を通じて収集を継続しているものもあるものの、なかなか埋められない。肖像権や使用权の問題など解決されねばならない問題も多い。また、新たな図像資料として認識し、その収集や保存利用をするものとして、例えば風景入り日付印（切手を抹消する消印の一種）がある。これは戦前より郵便局で使用されてきたものであり、明治・大正・昭和・平成その時々風景や、特産物などが描かれている。また、モチーフの改変も逐次行われており、切り取られた風景や描かれた景観の変化をとらえることができる。この種のスタンプは、日本ばかりでなく、旧植民地の地域、朝鮮半島、関東州、満州、中国大陸各地、樺太、南洋信託統治域などで使用されている。現在でも東アジア各国を中心に使用されているので、普遍性も強いのである。同様に、各国郵政が発行を続けている特殊切手のたぐいも収集・利用が図られてもよいと考える。また、日本で最初に景観写真が主要なモチーフとした郵便切手が発行されたのは、昭和10年代からのことで、日本の国立公園ばかりでなく当時の台湾、朝鮮半島の国立公園が採りあげられている。その後昭和20年代、40年代を中心に国立公園切手、国定公園切手のシリーズが発行されている。ここには先ほどの時期を埋める映像写真が利用されており、しかも公的なものであり間違いも少ないなど信憑性も高い。利用価値が大きいものと思われる。その他、各地の観光地のスタンプや地図やパンフレットの類など、現在となっては貴重な図像資料となるものも多い。これらのものは発行当初はチラシほどの価値であったろうが、今となっては極めて貴重なものといわねばならないものも多い。今のものはただ同然で入手可能であろうが、10年もたてばその入手は極めて困難だといわねばならない。スペースの限り収集し保存することは重要である。

さて、応用とフィードバックをふまえて新たな景観論の構築については、ヒトの空間認識と景観の関係性を考察することが重要である。例えば、年齢や性、職業、国籍など属性の異なる人々に写真を撮

ってもらい、異同についての分析を行うなど、実験的な景観認識手法と解析法を考案することもその視野に入れてもよいのかもしれない。多様なアプローチは本プログラムの趣旨に合致するものと考えられるからである。

IV 結 語

本稿では、渋沢コレクションの図像解析上の視角とその応用案について考察した。ただ今年度は研究の初年度であり、明確な視点設定と準備が少なかった。本稿をまとめていく段階で研究エッセイ⁽³⁾を著すことができ、またその折りに紙幅の関係で触れることのできなかつたいくつかの論点の整理を本稿で示すことができた。このような事情で、本稿は十分な議論、実態調査を経たものではない。このことを記し、本稿を次年度研究のための小活としたい。

付 記

本稿を作成にあたり、現地調査の際にお世話いただいた新潟県佐渡島、島根県隠岐島後、広島県尾道市向島、東京都新島、鹿児島県奄美大島他の方々にお礼を申し上げます。特に、新島村教育委員会の植松正光先生には年末のお忙しいなか貴重なお話を伺うことができました。記してお礼申し上げます。

文 献

- (1) 香月洋一郎「環境と景観の資料化と体系化」『非文字資料研究』No 1, 2003年 10月
- (2) 同 「研究拠点紹介日本常民文化研究所」『非文字資料研究』No 2, 2003年 12月
- (3) 八久保厚志「景色（景観）が変わるといふこと」『非文字資料研究』No 2, 2003年 12月

八久保（COE 共同研究員）